矢部 彰著
『森鴎外 明治四十年代の文学』
小 仲 信 孝

矢部彰氏はいま、文学研究に対して背水の陣を敷いている。三
年前、自身の言によれば、人生の残された時間のすべてを文学研
究に専念するべく、二十年以上わたる国語教師生活から身を退
くことを決意されたのである。その決断を伝え聞いたとき、これ
から実現されるであろう研究三昧の拡張を楽しみに思う以前に、
矢部氏の勇気を驚くと同時に、研究に対してそこまでの鰭鰭感も
焦燥感も持ったことのない自分自身を信じなくないと感じた思い
出。矢部氏の英断は、われわれ研究陣間で小川から切衝撃を与
える出来事であった。

その矢部氏の二冊の本がたてつづけに出版された。森鴎外
明治四十年代の文学」と「発言。葉私論」である。「森鴎外
的視点」近代文芸史」など、これまでもに三冊の著書が刊
行されているが、いずれも国語教育の実践の成果を中心にまとめ
たもので、実質的にはこの二冊が文学研究の分野における成果を
集大成したものとなっている。それぞれの内容を簡単に紹介して
おくと、「前者は『酒狂』『ギター・セクスアリズム』『青年』『カ
ズイスチ』『妄想』『雁』『灰燼』の八作品をめぐる十一編の作
品論で構成されている。後者は七編の作品論からなり、対象作品
は『大三女』『今夜が君を』『くぐれ』『よゆく雲』『尼江え』『十三夜』
の約七十五頁、原稿用紙に換算して千三百枚を優位に越える分量
の大半が書き下ろしなのである。発言。葉私論では『イ gì』
の大小が物語っているように思われる。さて、この二冊を読み終えての感想は、正直にいうと何より
小泉一雄の特性は、中学校途中退学者である石川啄木の
時代を描いたの現状。『明治43年』で言う「半分は職を得て下
宿屋にごろ。「はしごの」分別の、それでも「幸福」な教
育を奉仕する資力を持つ台半ばで奪われて、教育に
小泉一雄現代文学の「何十倍、何百倍する少数の青年」が教
育を奉仕する資力を持つ台半ばで奪われて、教育に
行かず三三人が未進者であるが、さらに彼等の事だ
けの「中途半端」な人生を送る「逝去」という不思議な階
級が次々に数を増しつつある。時代状況から隔絶されるもの
である。[青年] 論上に

矢部氏はここに例示したような、引用に引用を接続するレトリックを多用している。それは文体の個性である、粘り強い独特の言葉に混ざる必要はないのかもしれない。ただし、私にはどうしてかも気になっていたのだ。抑揚をつけずに並べられたことばの関係、及び論理路がずれて息の長い作者的思考回路と最後まで同調する力がなかった私には、こうした作者的文体が、ときどき論理の流れ自体を破壊しているように感じられたからなんだ。もちろん、私の読みの浅さにでもあるところがあるだろう。

論の丁寧さの現在であるということ。したがって、矢部氏の論述方法は、矢部の論の立場に立ったとき、円滑な読める回路を形成しちゃった文体であったことだけは指摘しておきたい。

特に、こうも言うであろう。文体の粘り強さは、すなわち論の丁寧さの現在であるということ。したがって、矢部氏の論の立場に立ったとき、円滑な読める回路を形成しちゃった文体であったことだけは指摘しておきたい。

シンデレラの話や、自分が背中を押されると、おとこが出でてくるという言葉がある。誠実という言葉が適した丁寧さである。「前略、以下の」という引用の仕方にもその一端が示されている。

もちろん、矢部の論の立場には、ひとつの特徴がある。論の丁寧さの現在であるということ。したがって、矢部氏の論の立場に立ったとき、円滑な読める回路を形成しちゃった文体であったことだけは指摘しておきたい。

研究の常道に遅れがなければ、敢えて指摘したいのは矢部氏の

する間点に達したと言及し、詳細に論じていく態度は貫らずに、

の論題をひっくり返してゆく。定説化した読むを否定的

の理由として、自己の新たな論理を紡ぎ出していく方法としてい

ル関係に達したと言及し、詳細に論じていく態度は貫らずに、

によって、論題をひっくり返してゆく。定説化した読むを否定的

の理由として、自己の新たな論理を紡ぎ出していく方法としてい

ル関係に達したと言及し、詳細に論じていく態度は貫らずに、

の理由として、自己の新たな論理を紡ぎ出していく方法としてい

ル関係に達したと言及し、詳細に論じていく態度は貫らずに、
うな感じして、やり直せてしまっている。新しい箇所の構築に
とうとしていることも承知している。にもかかわらず私が掏撈するのは、一
葉研究はすでに、たとえば「ただくらくら」論における前田愛の
二項対立の言葉のネットワーク、「個」と「町」を模る複数の
自然のシステムに近いものが見いだされていている。
なぜか、研究の現在の状態への理解がこの辺りを
ていよいよ珠に近いものと考えてよい状態にある。

「われらから論で矢部氏が示唆する言葉のネットワーク」(二項対
立の言葉のネットワーク)の特定の例として、
『詩の歌』・『詩の歌』を模倣するようなもの例が最近見つかる。
それには、矢部氏を模倣するようなものがあるが、
その内実に言及されていないものがある。

同一ことを「表裏・葉私論」に资源配置する。端的に言うと、
表裏のバランスが模倣研究と対照的であることがある。
締め返して言うと、この手法が良いと言うのではない。
模倣研究の成果を踏まえた上で、表裏のバランスが模倣研究
で必要になるだろうと考える。